



「組織」のツールの視点

シニアコンサルタント

渡邊 雄一

Yuichi Watanabe

yuichi@sra.co.jp

◆はじめに

OSS(Open Source Software)が広まるにつれて、誰でも気軽に高性能な「ツール」を使用することが出来るようになりました。その結果、個人のデスクトップには高機能なエディタや Eclipse のような IDE(Integrated Development Environment:統合開発環境)が置かれていると思います。また subversion のような、複数の人で情報共有するシステムも広く使われていると思います。

一方、IBM Rational などの商用ツールは、個々人で利用できれば良いだけでなく、組織の中の役割分担に従って利用されるものが多数を占めます。本稿ではツール導入における「組織」の視点の重要性を説明します。

◆手弁当作業の限界

小規模開発なら、経験の浅いチームでも、作業を分割してExcelシートで情報共有、というやり方で済みます。10人のチームではそのやり方で運用出来るかもしれませんが。しかし、20人、50人といった規模になると、「**誰がどこを直したか判らない**」「**いつの間にかファイルが壊れていて開けない**」などの問題に直面します。

中規模(概ね20人)以上の「プロジェクト」を経験された方は、『組織のためのツール』が介在してくれないと、自分の仕事は何なのか、どこに仕事の指示書や開発仕様書が格納されていて、どこに自分の開発成果物や進捗経過を保管すれば良いのか、困ってしまうことが容易に想像出来るでしょう。

このように利用の目的が「個人」ではなく「組織」にある

場合、その導入経緯や狙いが理解されることなく利用されていることが少なくありません。さらに開発現場では、開発そのものの技術革新に加えて、チームの生産性をニアショア、オフショアといった地理的・時間的な疎結合関係の中で、維持・成長させて行くことも迫られていて、一個人の作業の結果を一箇所の保管場所(リポジトリ)に時系列で格納しておけば良い、というのは過去の妄想になっています。

このことを頭に置いて、ツールの「機能」ではなく、メンバーの間の役割(ワークフロー)に着目して整理すると、個人(向け)のツールと組織のツールの違いが際立ってきます。例えば、誰がどのような操作をした結果、どこに成果物が置かれているのか? それをツールが記録しているのか? 誰がそれを参照したり修正したり出来るのか? などの点を評価検証の段階できちんと押さえておくことがとても重要です。

一方、ユーザ(やグループ)の責務役割(ロール)が設定出来るツールでは、機能が豊富な分、きちんとポイントを整理してから試用に臨まないと、些末な操作の確認だけで貴重な時間を浪費してしまうことになります。

◆「まずは、やってみよう」の落とし穴

最近では商用製品のトライアル版も、期間限定ではなく、少人数であれば自由に試用出来るものもあります。そのため「ツール導入支援」サービスを買わずに、自前で「まずは、やってみよう」と始める方も少なくありません。しかし、ここに「**組織の視点**」が抜けているとどうでしょうか?

弊社の経験では、技術担当の方が導入するツールの機能面を数日操作してみて、「あの機能は、ここが良いが、ここは使いづらい」といった評価を聞くことが少なくありません。現在の商用製品には、数百万円から、高いものでは数千万円するものもあります。ツールの機能は、お客様の立場で一番気になるところでしょう。しかしその先の観点、すなわち組織にどのようにしてスムーズに導入

するか、期待される効果が得られるようにするか、という評価観点がすっぱりと抜け落ちているのです。

◆ ツール置き去りプロセスの危険性

OSS の普及により個人中心の高機能ツールが広まったことと時を同じくして、組織で計画的にルールを守ってツールを使う組織力が落ちてきているように思われます。

プロセス改善の担当者は、多くの場合、認証取得の目的のために色々な規格類を読み解き、その組織に適合するために尽力されています。しかし、ツールの中身(求められる「機能」)は理解していても、導入される環境に適合するか? という点までは理解していないことが少なくありません。

一方、組織で運用するために作られた最近の高性能なツールは汎用の DBMS や Web サーバーを組み合わせて環境設定をすることが少なくありません。結果、高性能なツールにも関わらず基本機能を理解出来なかったり、準拠したい規格類との対応関係すら明らかに出来なかったり、ということが起こります。「XXを活用したライトウェイトなプロセス改善事例」などを読んでみても、少人数の組織の一部で成功してもそれが広まらないのは、**ツールの導入に組織の視点が十分ではないからでは、**と考えています。

◆ 「脆弱性」への取組の例

「構成管理ツール」に対しては組織の視点の重要性が理解できると思います。ここでは、組織の視点があまり着目されない例を挙げてみます。

ソフトウェアの「脆弱性」への対応は、非機能要件の中でも重要事項です。そのための対策として、「静的解析」ツールを開発や保守の「プロセス」に組み込むことを考えてみましょう。ツールの基本的な機能を把握したとしても、それを自社のプロセスに組み入れることは簡単なこ

とではありません。普段の開発+テストを振り返ってみると、機能要件のテストであれば不具合箇所の特定は比較的容易で、対策もさほど難しくないことが多いでしょう。しかし「脆弱性」の場合、まずツールが本当に正しく検知できているか、不安になりませんか?

貴方がマネージャーで、テスト担当のAさんが「いやあ、今回のプロジェクトは優秀ですよ。脆弱性検査で検地された結果は0件でしたよ」と報告を受けた場合、それを信じられますか? あるいは「いやあ、今回は多いですね。5000件ほど検知されました。これから個別に判定分析します」などと報告されたら、目の前が真っ暗になりますか?

ツールを組織で使うなら、「ツールを適用する人は本当に十分な知識を持っているのか?」「分析結果を判定する人は脆弱性に対して知見があるのか?」ということを加味して**「業務の流れ」**を考える必要があることが鮮明になってきます。まさに「組織の視点」です。

役割分担をはっきりさせ、それぞれが何を何時までに行う必要があるかを整理し、担当者間のデータがどのように授受されるかを考えると、自ずとどのような手順書が用意されている必要があるか、ツール操作に対する問題はないか、といった評価が行えると思います。

◆ まとめ

本稿では、忘れられがちな「組織の視点」とツールの関係について説明しました。実際の現場では、脆弱性の検討は「2回目の反復」で徹底すべきだ、とか、脆弱性の観点の設計レビューはどうするか、などの重要な話題がありますが、別の機会にご紹介したいと思います。

SRA では、製品(ツール)の導入・活用や開発プロセスへのコンサルティングまで、各種サービスを提供しております。担当営業までお気軽にお問合せ下さい。

※今月のコラムはお休みします。

夢を。

GSLetterNeo Vol. 40

2011年11月20日発行

発行者 ● 株式会社 SRA 産業第1事業部

編集者 ● 土屋正人、柳田雅子、野島勇

ご感想・お問い合わせはこちらへお願いします ● gsneo@sra.co.jp



株式会社SRA

〒171-8513 東京都豊島区南池袋2-32-8

夢を。Yawaraka Innovation
やわらかいのべしょん